

森のちやれんがニュース

2026 秋

Newsletter vol.45



第12回特別展・令和8年度アイヌ工芸品展 「沙流川に生きる——サルンクルの近代」 Nupursar kotan ta: sinrit orwano tan te paknoを開催しました (2026年7月11日～9月6日)

日高地方は北海道内でもアイヌ民族が多く居住してきた地域で、とくに日高山脈に源を発し太平洋に注ぐ沙流川流域には、先史時代に始まり、現代にいたるまで実物資料や記録類が他地域に比べて豊富に残され、文化伝承の中心地の一つとして知られています。本展では、そうした沙流川流域に関する資料のなかでも、時代や作成者・使用者が明らかな実物資料（民具等）と、関連する写真や文書等を組み合わせて、明治期以降に急激な変化を余儀なくされ厳しい時代を生きてきた人びとの姿を描き、現代を生きる人との繋がりを

示しました。

写真に映った人物とその眼差し、かつて居を構えていた場所の現在、当時使用された衣服や道具など、個々の展示資料が持つ情報から読み取れる事実を研究によって丁寧に浮かび上がらせることにより、それぞれの人物像や人々のつながりを、具体的に思い描くことができました。今回の展示は「民族共生の社会」をいかに実現し、発展させていくかを考えるきっかけともなったのではないのでしょうか。

（学芸主査 高橋佳久）



CONTENTS

- ② **収蔵資料紹介**
除雪はゆるくない—三角ぞりの秘密
- ③ **総合展示資料紹介**
アイヌの衣服展示の「こだわり」
- ④ **研究活動紹介**
昆虫の新種はどうやって見つかるのか？
解説案内スタッフレポート
ヒグマ体験しませんか！
トピックス
開拓の村の建物内部展示が一部リニューアル！
- ⑦ **アイヌ民族文化研究センターだより**
特別展示「沙流川に生きる——サルンクルの近代」を開催しました
- ⑧ **活動ダイアリー**
2026年6月～2026年8月の記録

収蔵資料紹介

除雪はゆるくない—三角ぞりの秘密

山 際 秀 紀

北海道研究センター(人文系) 学芸主査

今回ご紹介するのは、総合展示で写真のみ展示している三角ぞりです。

これまででは、一般的に昭和30年代頃まで、馬が馬車や農具を曳いた時代に使われたこと、三角の箱に人が乗り、馬1頭に曳かせて、新雪の道をラッセルした除雪用のそりであることが分かっていました。その後の三角ぞりに関する私の調査を振り返り、ここに記します。

○当館所蔵の三角ぞりの調査から

当館の三角ぞりは、1969(昭和44)年の調査時に「除雪機」や「三角(雪よけ機)」と記載されて、登録資料名は「三角形除雪機」になりました。

木製の三角の箱は、縦103cm×横幅92cm×高さ29cm、先端の角度は約50°です。雪をかく先端は金属板で補強され、その内側の角材に2重の番線(4mm)を通して曳かせます。底板のうらには、直進の安定を図る2本のスキー状の板がつけられています。

また、先端の金属部分には、製造会社の製作を示すと思われる紙のラベルが貼られています。

○三角ぞりに関する文献の調査から

1877(明治10)年から翌年の開拓使文書に、営繕課と勸業課の「雪除器」

の借用と返却に関するやりとりと除雪器の図(底板のない側板2枚の上を横木でつなげた形)が書かれています。また、土木課から勸業課へ雪除器使役用に馬2頭と御者を差し回してほしいという照会の文書は、少ないながら国内製の三角ぞりが複数あったことと、その操作に熟練がいることを示唆しています。

1884(明治17)の取裁録には、桑園で使う「雪払三角」の購入伺いの文書に、「三角」の名が確認されました。

1933(昭和8)年には、積雪地方農村経済調査所(雪調^{せっちよう})が、山形県選出の議員の働きかけで、新庄町(現、新庄市)に設置されました。その報告書には、北海道、岩手県、富山県の三角ぞり(現在は、山形県立博物館で収蔵)と、岩手県の三角ぞりに2人が座って乗った写真が掲載されています。

○三角ぞりに関する聞き取り調査から

これまで道内で行ってきた三角ぞりに関する以下の聞き取り調査では、使い方や、大きさや構造など、必ずしも一様ではないことが垣間見えました。

●札幌市豊平区 昭和18年生 男性
「三角と言った。国道36号が砂利道で、通学路を3～4人が交代で除雪した。」

●札幌市豊平区 昭和22年生 男性
「昭和30年代、周辺の約30軒が各1頭の農耕馬を飼い、冬は各家までの引き込み道路を除雪した。三角は父親が自分で作り、1人で立って乗った。」

●札幌市白石区 昭和19年生 女性
「昭和34年にお嫁に来た頃は、まだ三角を使っているのを見た。三角には、人は乗らず、牛乳缶を載せて酪協へ運んだ。」

●札幌市豊平区 昭和9年生 男性
「子供の頃に、三角で除雪するのを見た。そのウラに並行の板2本をつけたが、まっすぐ進まずふらついていた。」

●妹背牛町 昭和初期生 男性
「昭和20年代前半、駅前で見た。馬追さんが立つ後に座った人が乗った。」

この場を借りて、調査にご協力頂いた方々に感謝を申し上げます。

タイトルに使った「ゆるくない」は、北海道弁で大変だという意味です。

北海道では、雪が降ると馬もゆるくなかったのです。

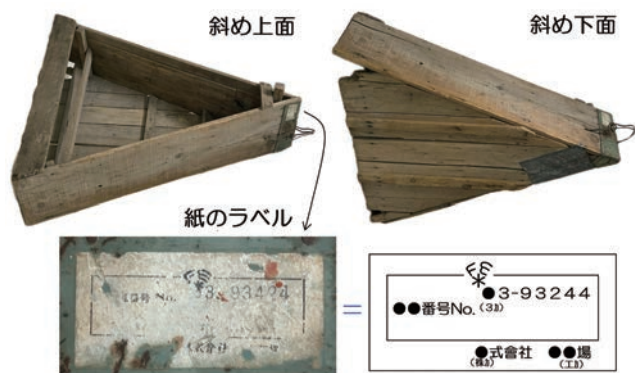


写真1 三角形除雪機(資料番号:5122 使用地:新篠津村)

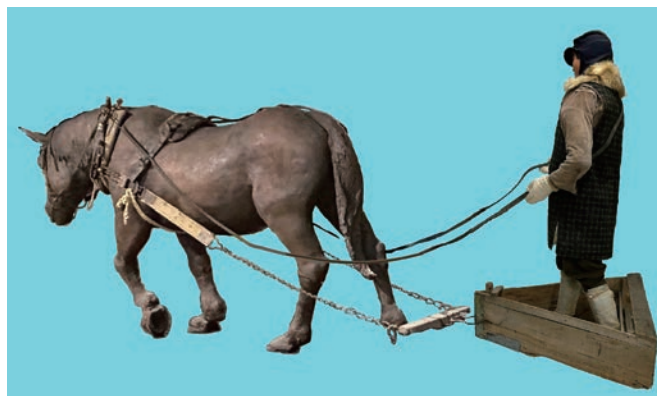


写真2 比較的多かった三角ぞり使用法の再現(著者作成)

総合展示資料紹介

アイヌの衣服展示の「こだわり」

大坂 拓

アイヌ民族文化研究センター 学芸主査

アイヌ文化に関する展示のなかで、特に高い人気があるのが伝統的な衣服の数々です。これまで、当館の総合展示第2テーマ「アイヌ文化の世界」では、展示スペースの関係から基本的に一度に1点ずつしか衣服を展示することができませんでしたが、先ごろの展示改修で、樺太アイヌのものと、北海道アイヌのものをそれぞれ展示できるようになりました。さらに、北海道アイヌの衣服についてはマネキンを2体用意しました。これにより、衣服をどのように重ね着したのか、装飾品をどのように組み合わせたのかを分かりやすく示すことができるようになり、また、男女の装い、日常の装いと儀礼の装いの違いなどを対比しながらご覧いただくような展示作りも可能になりました。

北海道アイヌの衣服に関する改修後第一弾の展示は、黒裂置文衣(くろきれおきもんい)の上に白布切抜文衣(しろぬのきりぬきもんい)を重ね着し、儀礼用の太刀を刀帯で佩き、頭部には儀礼用の冠をかぶった姿としました。これらの資料は残念ながらいずれも収集地が不明なのですが、それぞれの特徴をもとに、胆振地方の鶴川から日高



写真1 展示改訂後の第一弾の組みあわせ



写真2 耳輪の方向にも担当者のこだわりを込めました

地方の新冠に至る地域の特徴を再現した組み合わせにしてあります。「胆振東部～日高西部に住んだ男性の儀礼の装い」が、今回のコンセプトです。

耳元に吊り下げた耳輪は、耳たぶの後ろ側から通した状態を再現してあります。耳輪は明治初期に開拓使によって男性の着用が禁止され、その後、男女ともにかなり早い段階で廃れていったうえ、研究者の関心を集めた

かったためか、着用方法に関する具体的な記録は残されていないようです。そこで、19世紀後半から20世紀前半にかけて撮影された「アイヌ風俗写真」を調査したところ、耳輪を着用した人物は、耳たぶまで確認できるものではほぼ例外なく、後ろから耳輪を通していることが分かりました。現代のピアスからの連想で、なんとなく前から通したように思いがちですが、そうではなかったのです。

今後も、このように細部までこだわり抜いた衣服展示を試みていきたいと考えていますので、どうぞお楽しみに。

研究活動紹介

昆虫の新種は どうやって見つかるのか？

堀 繁 久

北海道研究センター（自然系） 学芸員



1961（昭和36）年、北海道札幌市生まれ。1999年より当館（旧北海道開拓記念館）学芸員。担当は昆虫を中心とした無脊椎動物。主に、オサムシ科甲虫群集、野幌森林公園の生物インベントリ、日本及び周辺の昆虫相について調べている。写真は、2026年春にフィリピン・ミンダナオ島の世界自然遺産ハミギタン山で甲虫調査したときのもの。熱帯の調査でここまで昆虫が少なかったのは初めての経験。日本だけでなく世界中で昆虫が減少していることを実感した。

アマゾンの源流やボルネオのジャングルには、まだ名前のない昆虫が数え切れないほど生息しています。しかし、私たちの日々の暮らしのすぐそば、近所の森や公園にも、実は未知の新種がまだまだ隠されています。

では、一体どんなタイミングで「新種」と分かるのでしょうか？ パツと思ひ浮かぶのは、特定のグループを専門に研究する中で、まだ見ぬ未知の種に出会う瞬間です。これは分かりやすいものの、そう簡単に会えるものではありません。2つ目は、野外で採集した昆虫をルーペや実体顕微鏡で観察し、これまで見たことのない種だと気づいた時。3つ目は、姿形が似ている昆虫の「交尾器」を解剖し、全く異なる形をしていると判明した時です。また、成虫の見た目は同じでも、卵や幼虫の姿や色が違って別種と分かることもあります。さらに最近では、DNAの塩基配列を解析した結果、別種であることが明らかになるケースも増えて

います。

なお、日本国内でこれまで知られていない昆虫を見つけた時は、まず海外で同じ種が記録されていないかを調べます。海外ですでに記載されていれば「日本新記録種」、該当する種がなければ「新種記載」へのステップが始まります。

ここで、筆者が過去に出会った、忘れられない新種発見のエピソードをいくつかご紹介しましょう。

1. 初めての発見（西表島）

10代の終わり、琉球大学の生物部で後輩たちと西表島を横断していた時のことです。島の中央で、後輩たちがランタンを取り囲み、その灯りに集まる昆虫を採集していました。「それに混ざって採るのも大人げないなあ〜」とテントでふて寝していたところ、テントに大型の甲虫がぶつかる音がしました。ゴソゴソと這い出して拾い上げた瞬間、驚きました。なんと、西表島にはいないはずのクワガタムシだったのです。これが、のちに私が「リュウキュウコクワガタ」（図1）の亜種として初めて記載した昆虫です。

2. 北大雪・平山での大発見

これまでで一番の驚きは、北海道が実施した「すぐれた自然地域」の現地調査で、ピットフォールトラップ（落とし穴罠）で見つけた「エゾユキシリアゲ」（図2）です。当時、日本から全く見つかっていなかったユキシリア

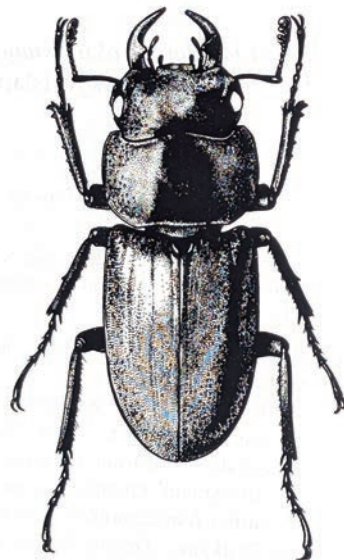


図1 ヤエヤマコクワガタ *Dorcus amamianus yaeyamaensis* (Hori, 1994) の原記載図

ゲ科 (Boreidae) の新種でした。コガネムシ科の新種であるヤンバルテナガコガネよりも、「日本に存在しなかった新しい科の昆虫を見つけた」という意味で、個人的には非常に大きな発見だと思っています。

3. 野幌森林公園での発見

野幌森林公園では長年、生物インベントリ調査を続けています。当初、溜池を中心にゲンゴロウの調査結果をまとめたところ、それを見た北大の院生の岡田亮平氏から「堀さんが野幌から記録された流水性のモンキマメゲンゴロウは本当にその種ですか？」と問い合わせがありました。慌てて標本を見直すと、明らかに特徴が違っていて別種でした。勝手に斑紋変異と思い込み、細部まで見ていなかった自分を恥じた瞬間です。まさに灯台下暗しとはこのことだったのかも知れません。この標本を基に、野幌森林公園を模式産地(タイプローカリティ)として、のちに「ニセモンキマメゲンゴロウ」(図3)として新種記載されました。

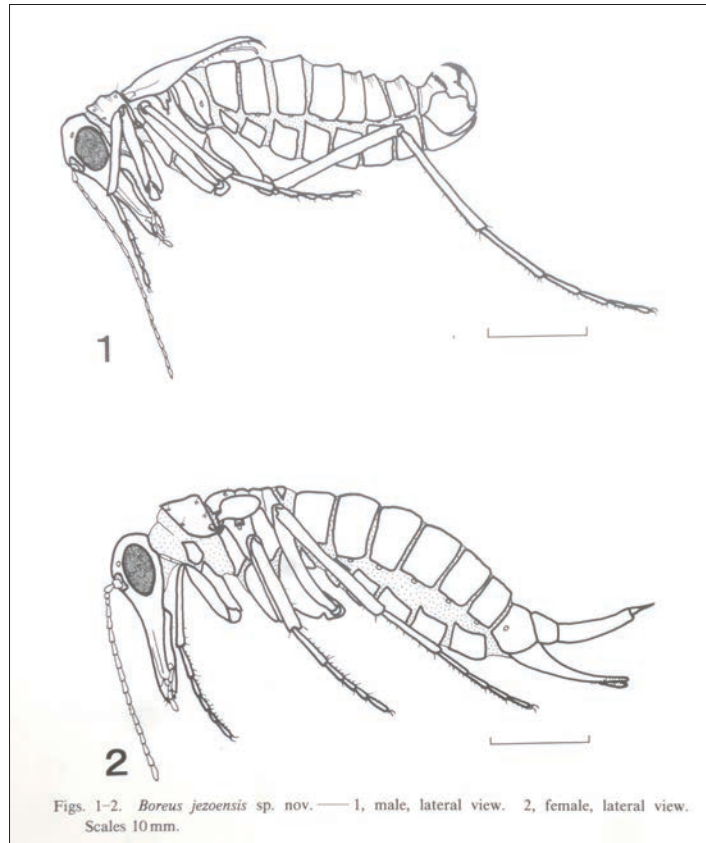


図2 エゾユキシリアゲのオス *Boreus jezoensis* Hori & Morimoto, 1996 の原記載図

野幌森林公園の調査では、衝突板トラップ (FIT) などを用いて多くの微小甲虫が捕獲されており、「クロダヒゲブトチビシデムシ」や「ヨシタケオオタマキノコムシ」(図4) など、ここ

で見つかった標本を元に新種記載された昆虫がいくつもあります。

今後も、野幌森林公園や北海道の自然から、まだまだ多くの新種の昆虫が見つかっていくことが期待されます。



図3 ニセモンキマメゲンゴロウ *Platambus convexus* Okada, 2011



図4 ヨシタケオオタマキノコムシ *Leiodes yoshitakei* Hoshina, 2012の
パラタイプ標本

解説案内スタッフレポート

ヒグマ体験しませんか！

小澤 乃子

事業部 教育・広報課 解説案内スタッフ

総合展示第5テーマの「生き物たちの北海道」のコーナーには大きなヒグマが寝そべっています。お客様に「びっくりした!」と言われることもあるのですが、精密なスケッチを基に本物そっくりに作られたぬいぐるみソファです。

子供達は5テーマに来ると喜んでクマに座ったり寝そべったりしてくれるのですが大人の皆さまは遠慮しているように思えます。ぜひ座ったりなでてあげたり

してみてください。巣穴の中のクマはこんな姿で眠っているのですね。

それから動物たちの森のトンネルの前にヒグマの足跡があります。小さい足跡が前足で大きい方が後ろ足です。手と足を使ってたどっていけばヒグマみたいな様子で穴に入っていけるのです。後ろ足を前に出しながら前足(手)もその先につく動作が難しくて私もまだ修行中の身なのですが、5テーマにいらしたら挑戦

してみてください。

本物のヒグマにさわることはいしクマのニュースは怖くて胸が痛みます。

でものんびり寝ているぬいぐるみをさわったりクマ歩きをしてみると違った気持ちを楽しめます。

ぜひヒグマ体験してみてくださいね。



写真1 ぐっすりお休み中のぬいぐるみソファ



写真2 巣穴(トンネル)に入っていくところです



写真3 表学芸員に着ぐるみを着せて赤ちゃんの抱っこを再現してもらいました

トピックス

開拓の村の建物内部展示が一部リニューアル！

鈴木 明世

博物館研究センター 研究職員

野外博物館「北海道開拓の村」では、建物の中の展示を、文化庁の補助事業により、2023年度から2027年度にかけて毎年1棟ずつ改訂しています。昨年度までに、旧小樽新聞社、旧岩間家農家住宅、旧北海中学校の展示が新しくなりました。

建物内部の展示や資料の多くは、建物が開拓の村へ移築・復原、再現された際に整備されたものです。なかには、1983年の開村以来、40年以上親しまれてきた展示もあります。今回の改訂では、建物が使われていた時代の北海道を、これまで以上に深く知っていただくことを目指しています。

その中で意識している観点の一つは、建物の背景にある物語を伝えることです。解説パネルや体験展示をとおして、建物の特徴だけでなく、そこで営まれたくらしにも目を向けられるようにしています。旧岩間家農家住宅で

は見学できる範囲を広げつつ、建物内部の雰囲気や損なわないよう、ウェブを使った解説にも取り組んでいます。

もう一つは、これまで開拓の村では紹介されてこなかった、アイヌ文化に関する展示を整えることです。開拓の村は、おもに1910年代ごろ(明治末から大正時代)の北海道の風景を意識してつくられており、それぞれの建物にまつわるくらしにも、アイヌの人びとの関わりがありました。それらの関わりについて紹介することで、当時の北

海道の姿を、より広い視点から知っていただきたいと思います。

建物だけでなく、その中で伝える物語も少しずつ変わっている開拓の村を、ぜひお楽しみください。



旧岩間家農家住宅：ウェブ解説ページ

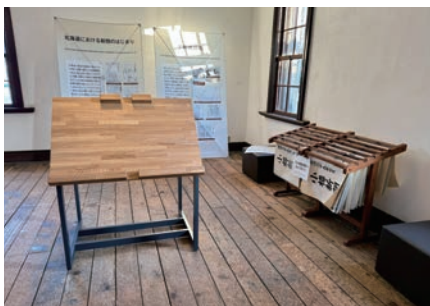


写真1 旧小樽新聞社：古新聞の閲覧体験展示



写真2 旧岩間家農家住宅：くらし体験展示

アイヌ民族文化研究センターだより

特別展示『沙流川に生きる——サルンクルの近代』を開催しました

本年7月11日から9月6日まで、第12回特別展『沙流川に生きる——サルンクルの近代』を開催しました。今回の展示は公益財団法人アイヌ民族文化財団が実施する「アイヌ文化普及事業」の一環である「アイヌ工芸品展」として企画されたもので、同展の当館での開催は2021年の『アイヌのくらし——時代・地域・さまざまな姿』に続いて2回目となります。

前回の『アイヌのくらし』展が、アイヌ民族がくらししてきた北海道・樺太南部・千島列島を対象として、それぞれの地域を等価にあつかい、全体を俯瞰する試みであったのに対し、今回の『沙流川に生きる』展では、対象を沙流川流域という一地域に絞りました。しかし、二つの展示には共通するコンセプトがあります。それは、製作者・使用者が明らかな資料をカギとして、工芸品を人につなぎ、一人ひとりが生きた時代背景のなかに位置づけていくというものです。

今回の展示における重要な軸の一つは、平取町二風谷に生まれた二谷国松さん（1888～1960）のあゆみでした。



写真1 二谷国松さんの写真と、その中で着用している衣服を並べて展示しました

二谷さんの名は、これまでも沙流川流域を代表する伝統文化の伝承者、数多くの研究者に協力してきた功労者としてよく知られてきました。しかし、二谷さんがどのような歴史的環境のなかを生き、なぜ文化の記録保存を願ったのかといった側面が注目されることはほとんどありませんでした。今回の展

示では、二谷さんが作ったモノに関係する文書、写真、さらにご遺族の証言などを組み合わせ、これまで語られてこなかった側面を浮き上がらせることを試みました。

二谷さんはある和人研究者に伝統文化の記録を勧めながら、アイヌの伝統文化が理解されれば、「今まで一口に未開だの野蛮だのと言われて来た私たちの生活の中にも、ちゃんと深い信仰に根ざした考え方があることに気付かれるだろう」と語っていました。この言葉は、二谷さんが伝統文化を語り残した動機の一つに、自分たちを苦しめる偏見と人種差別の解消という願いがあったことを示しています。

本展は、9月から大阪の国立民族学博物館で巡回開催されます。展示企画委員の一人として、今回の展示が、語り残された文化だけでなく、語り残した人びとの願いについて思いを巡らせるきっかけになれば、心から嬉しく思います。

（大坂 拓：アイヌ民族文化研究センター 学芸主査）

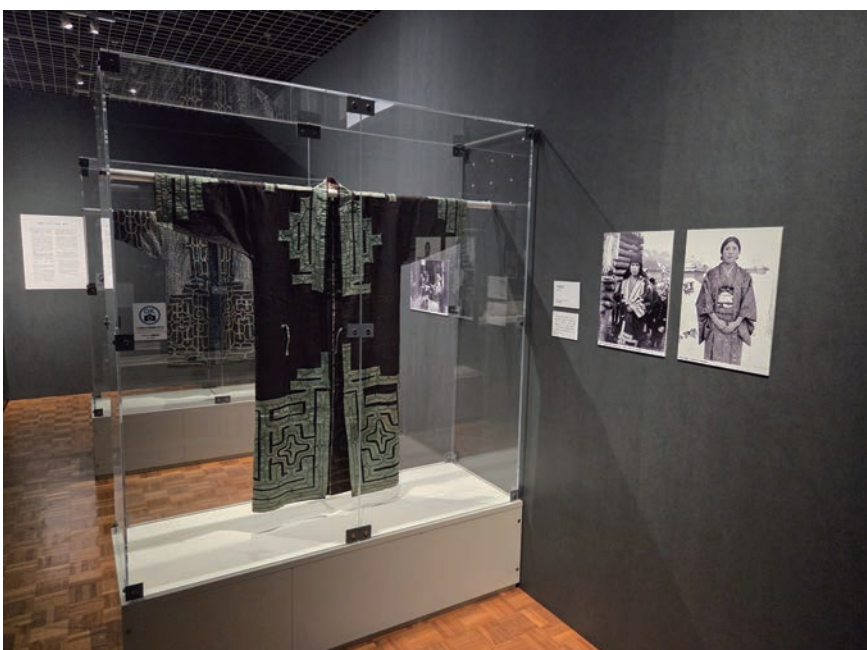


写真2 二谷さんの三女、朝見さんの衣服も展示しました

活動ダイアリー

2026年6月～2026年8月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。
 ※教育普及活動の担当あるいは講師で、所属の記載が無い者は当館職員です。

6月6日(土)

- 古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)第3回」を開催。担当:三浦泰之・東俊佑。
- アイヌ語講座「アイヌ語講座～きほんのキ～(全4回)第3回」を開催。担当:吉川佳見。

6月12日(金)

- 総合展示室 クローズアップ展示②と⑤を展示入替(⑥～⑦は8月6日(木)まで)。
- ②弥永コレクション-文書資料を中心にー
- ⑤北海道大センバコキ展

6月13日(土)

- 特別イベント「博多から北海道へー芦別健夏山笠の落語とおはなしー」を開催。講師:林家とんでん平(落語家)、田中広吉・関谷誠・後藤正紀(芦別健夏山笠振興会)、谷口生貴斗。

6月14日(日)

- ワークショップ「石の中からホンモノの化石を掘りだしてみよう! (同日2回開催)」を開催。担当:圓谷昂史・久保見幸・成田敦史、北海道化石会会員【写真1】。

6月17日(水)

- 館内定例研究報告会を開催。発表者:葛野大喜・佐々木利和。

6月20日(土)

- アイヌ語講座「アイヌ語講座～きほんのキ～(全4回)第4回」を開催。担当:吉川佳見。

6月27日(土)。

- 古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)第4回」を開催。担当:三浦泰之・東俊佑。

6月28日(日)

- 休憩ラウンジ 道民参加型展示「北海道のアンモナイト」開催(2027年3月31日(水)まで)。

7月11日(土)

- 第12回特別展・令和8年度アイヌ工芸品展「沙流川に生きる——サルンクルの近代」Nupursar kotan ta: sinrit orwano tan te paknoを開催(9月6日(日)まで)。
- 講演会「「アイヌ工芸品展」の未来」を開催。講師:大坂拓【写真2】。

7月17日(金)

- 世界遺産登録5周年記念展示「北海道・北東北の縄文遺跡群とカックウ・ビビちゃん&その仲間たち」を開催(11月29日(日)まで)。

7月18日(土)

- 古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)第5回」を開催。担当:三浦泰之・東俊佑。

7月20日(月・祝)

- 屋上スカイビュー特別開放を開催。
- ミュージアムトーク「北海道のセンバコキについて(同日2回開催)」を開催。担当:波田尚大。

7月22日(水)

- 館内定例研究報告会を開催。発表者:奥田統己・谷口生貴斗。

7月31日(金)

- 教員のための博物館の日 in 札幌を開催。

8月1日(土)

- 講演会「祖父二谷国松の思い出」を開催。聞き手:大坂拓。

8月7日(金)

- 総合展示室 クローズアップ展示⑥～⑦を展示入替(①、②は10月8日(木)まで、その他は12月16日(水)まで)。
- ①世界最古のチョウノスケソウ化石
- ①軽物一松前藩が狙った北の富一
- ②新選組の元幹部隊士 永倉新八
- ③【特別展関連】128年前のサルンクルの手紙
- ④北海道博物館が所蔵する飾り矢筒
- ⑤移住者の家のたからもの
- ⑥住まいを彩る小さな美
- ⑦【企画テーマ展関連】鳥の翼を大解剖!

8月8日(土)

- 古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)第6回」を開催。担当:三浦泰之・東俊佑。

8月11日(火・祝)

- 屋上スカイビュー特別開放を開催。
- ミュージアムトーク「展示解説 沙流川に生きる(同日2回開催)」を開催。担当:大坂拓。

8月15日(土)

- 自然観察会「トノサマバッタとオオカマキリをさがそう!!」を開催。担当:堀繁久・表深太・水島末記・自然ふれあい交流館スタッフ【写真3】。

8月16日(日)

- 講演会「昭和期の北海道観光と二風谷」を開催。講師:関根真紀氏(工芸家)、山崎幸治氏(北海道大学)。

8月18日(火)

- 博物館実習生の受け入れ(8月29日(金)まで)【写真4】。

8月23日(日)

- 講演会「樺太のサルンクル、沙流のカラフトウンクルー交差する二つの歴史」を開催。講師:北原モコットウナシ氏(北海道大学)。

8月26日(水)

- 館内定例研究報告会を開催。発表者:大坂拓・表深太。

8月29日(土)

- 古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)第7回」を開催。担当:三浦泰之・東俊佑。



写真1



写真2



写真3



写真4

来館者数

○2026年6月～8月

総合展示室 21,523人 特別展示室 6,582人 はっけん広場 2,718人

○累計(2015年4月～2026年8月)

総合展示室 993,108人 特別展示室 663,401人 はっけん広場 150,396人

森のちゃれんがニュース 第45号

発行日:2026年9月25日

編集・発行:北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2026